

2024/8/18

ルカの福音書 講解メッセージ⑱

『ルカの福音書 8章 1-21節 種まきの譬え』

■マグダラのマリヤ

「その後、イエスは、神の国を説き、その福音を宣べ伝えながら、町や村を次から次に旅をしておられた。十二弟子もお供をした。また、悪霊や病気を直していただいた女たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリヤ、自分の財産をもって彼らに仕えているヘロデの執事クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか大ぜいの女たちもいっしょであった。さて、大ぜいの人々の群れが集まり、また方々の町からも人々がみもとにやって来たので、イエスはたとえを用いて話された。」(ルカ 8:1-4)

マグダラのマリヤは、イエス様の生涯の重要な局面である、十字架、埋葬、復活のすべてに立ち会っていた女性で、大変信仰深いことで知られています。彼女について、「七つの悪霊を追い出していただいた」とありますが、七つの悪霊とは、非常に多くの罪が赦されたという意味の表現です。「多く赦された者は多く愛するようになる」という御言葉のとおり、多くの罪が赦されたマリヤは、深く神を愛する者となりました。神を愛すること、それが神への信仰です。十二弟子は、イエス様を裏切って逃げ、御言葉を信じることができずに墓にも行きませんでした。マグダラのマリヤは十字架にも埋葬にも復活にも立ち会いました。それは、それだけイエス様を信じて信頼していたからです。

神の第一の戒めは、「神を愛しなさい」です。しかし、どんな努力をしても愛せるようにはなりません。ただ、罪が赦されたということを知れば知るほど、神を愛する思いが湧き起こるのです。自分には罪がないと言う人は、神を愛することはできません。

旧約聖書に登場するヨブは、人々から最も立派な人だと思われており、ヨブ自身も自分には罪がないと思っていました。しかし、神によって罪があぶり出され、彼は頭から灰をかぶって悔い改めるに至ったのです。どんなに立派な行いの人でも、この地上で死の体を持っている限り、自分では気づかないだけで、多くの罪を持っているのです。

罪を持っているとは、制約・制限があるということです。私たちは本来神を愛し人を愛するように造られているのですが、それができないのは、この世界に死が入り込

んだからであり、その結果、制約があるからです。制約とは、弱さ・不足とも言われます。自分の弱さに気づき、神がこの弱さを担ってくださると気づくことができれば、神と共に歩いていく道が開けます。自分の弱さを認めることは恐ろしいことではなく、足りなさを補ってくださる十字架がそこにあるということです。そのことを知れば、イエス様を心から愛せるようになります。マグダラのマリヤはそれを経験したのです。

また、イエス様に付き従っている弟子の中には、自分の財産をもって彼らに仕えている人がいました。ここに、イエス様と弟子たちの伝道生活を支える支援者の存在が、明らかにされています。神のために働くとき、神は必ず経済的にも助けてくださることが分かります。

■種まきのたとえ

「種を蒔く人が種蒔きに出かけた。蒔いているとき、道ばたに落ちた種があった。すると、人に踏みつけられ、空の鳥がそれを食べてしまった。また、別の種は岩の上に落ち、生え出たが、水分がなかったので、枯れてしまった。また、別の種はいばらの真ん中に落ちた。ところが、いばらもいっしょに生え出て、それを押しふさいでしまった。また、別の種は良い地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ。」イエスは、これらのことを話しながら「聞く耳のある者は聞きなさい」と叫ばれた。さて、弟子たちは、このたとえがどんな意味かをイエスに尋ねた。そこでイエスは言われた。「あなたがたに、神の国の奥義を知ることが許されているが、ほかの者には、たとえで話します。彼らが見ていても見えず、聞いていても悟らないためです。」(ルカ 8:5-10)

神の国は、時間に支配されることなく、変わらずにあり続ける世界です。しかし、この世界は時間に支配されています。制限のない世界が本物の世界であって、この世は偽物です。イエス様は、「全世界を手に入れても永遠のいのちを手に入れなければ何になるのか」と言われました。この世界はすべてなくなります。なくならないものが本物です。

制限された世界に生きている私たちは、制限されていないものを表現する言葉を持っていません。そのため、イエス様は神の国のことをたとえで説明されるのです。すると、私たちの心には神のいのちの土台があるため、神のことばは理屈抜きに心に響き、聖霊の助けによって、おぼろげながら神の国のことがわかるのです。神のことばは、聖霊の助けなしには理解できません。

「このたとえの意味はこうです。種は神のことばです。道ばたに落ちるとは、こういう人たちのことです。みことばを聞いたが、あとから悪魔が来て、彼らが信じて救われることのないように、その人たちの心から、みことばを持ち去ってしまうのです。」(ルカ 8:11-12)

種は、御言葉を指します。私たちの中には、神のことばがまかれています。それは、魂を通して、神の呼びかけ、すなわち神のことばを聞いているということです。しかし、私たちは、死の体による制限によって、制約されたことばで思いめぐらすしかなく、神の言葉に対して葛藤が生まれます。たとえば、神は私たちに永遠のいのちがあることを教えますが、目に見える情報は必ず死ぬというものです。神は私たちに無条件で愛されることを教えますが、この世界では常に条件があり比較があります。そこで、神のことばは嘘ではないかと葛藤が生まれるのです。

「肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。」(ローマ 8:6-7)

私たちの心の中には肉の思いと御霊の思いがあり、常に葛藤しています。「肉の思いは死である」とは、肉の思いと死は同じものであるということです。肉の思いは死から生まれたということではありません。死を司るのは悪魔です。つまり、悪魔が御言葉をふさぐということです。

「いのち」は神を指します。つまり、私たちの心の中で死による思いと神の思いが葛藤しているということです。死は悪魔から来ているので、その制約に負けてしまうと、神のことばを聞いても実を結ぶことはありません。私たちが救われないように、悪魔は激しく挑戦してきているのです。

■岩の上に落ちる

「岩の上に落ちるとは、こういう人たちのことです。聞いたときには喜んでみことばを受け入れるが、根がないので、しばらくは信じていても、試練のときになると、身を引いてしまうのです。」(ルカ 8:13)

根がないということは、この人は救われたばかりの幼子です。クリスチャンにとって試練とは、ただの苦しみや困難ではなく、神を信じるか、あきらめるかを問われる

ときのことです。世の人にとっては、試練とはただの困難であり、自分で乗り越えるかどうかですが、クリスチャンにとっての試練とは、信仰が試される時のことです。つまり、まだ信仰が浅く土台がないため、試練の時に身を引いてしまうというのです。

「なぜ、わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、わたしの言うことを行わないのですか。わたしのもとに来て、わたしのことばを聞き、それを行う人たちがどんな人に似ているか、あなたがたに示しましょう。その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、それから家を建てた人に似ています。洪水になり、川の水がその家に押し寄せたときも、しっかり建てられていたから、びくともしませんでした。聞いても実行しない人は、土台なしで地面に家を建てた人に似ています。川の水が押し寄せると、家は一ぺんに倒れてしまい、そのこわれ方はひどいものとなりました。」（ルカ 6:46-49）

経験がないのは、御言葉を実行していないからです。土台は普段目に見えませんが、試練が来たときに、土台があるかどうかわかります。その土台は、御言葉を実行することによって成長します。信仰とは信じることであり、服従するということです。従うことのない信仰はありません。心で思うばかりで実行に移すことが欠けてしまうと、土台がないために、困難にぶつかるとうすぐに逃げ去ってしまうことになるのです。

■いばらの中に落ちる

「いばらの中に落ちるとは、こういう人たちのことです。みことばを聞きはしたが、とかくしているうちに、この世の心づかいや、富や、快樂によってふさがれて、実が熟するまでにならないのです。」（ルカ 8:14）

経験のあるクリスチャンが実をならすことができない理由は、世の心づかいや富や快樂です。この世の心遣いとは、神のことよりも人のことを思うということです。イエス様はペテロに「下がれ、サタン」と言ったことがあります。それは、神のことよりも人のことを思っていることが理由でした。あなたは、神のことを優先しているのでしょうか。それとも、人から良く思われることを優先するのでしょうか。これが、クリスチャンにとっての最大の敵であり、弱みです。自分が人からどう思われるかを気にすると、せつかく土台があるのに実がなりません。ペテロは世の心づかいが優先して、ついには「イエス様を知らない」とまで言いました。世の心づかいが大きな壁になっています。

また、富によって実を結ばなかった代表がユダです。ユダはお金に目がくらんで、イエス様を突き出しました。イエス様を裏切ったということにおいては、ペテロもユダも同じです。ただ目的が異なり、人から悪く思われたくないか、お金が欲しかったかの違いです。この二つの誘惑は、私たちにとっても常にあるもので、これが、神のことばが実を結ぶことをふさいでしまうのです。さらに実を結ばせないものに、快樂、すなわち、この世の楽しみがあります。クリスチャンが、この世の楽しみを神のことばよりも優先してしまう場面は、多々見受けられます。

みことばが結ぶ実とは平安です。神が与える平安は、この世が与える平安とは違うと聖書にあります。それは、言葉では説明できない安息です。パウロは、この安息を知ってから、ほかのものをちりあくたと言いました。神の計画は私たちに平安を与える計画です。神は私たちに、御言葉によってもたらされる平安な義の実を与えようと計画しておられるのです。ところが、クリスチャンであっても、不安のほうが大きく、なかなかその安息を手にする事ができません。どうすればよいのでしょうか。

■良い地に落ちる

「しかし、良い地に落ちるとは、こういう人たちのことです。正しい、良い心でみことばを聞くと、それをしっかりと守り、よく耐えて、実を結ばせるのです。」(ルカ 8:15)

正しい良い心で御言葉を実行することが重要です。パリサイ人たちも御言葉を実行していましたが、彼らは良い心からではなく、自分が正しい人間であることを証しするために実行していました。

■正しい良い心とは

1. 罪深い自分を認められる心

本当に正しければ、自分の罪を認めることができます。聖書が示す罪の基準を、もしあなたが真摯に受け止めるなら、自分がいかに罪深いかわかります。聖書は私たちに、あなたの敵を愛せ、怒ることは人を殺すのと同じ、心に思うだけでも罪だと教え、99のことが守れても、ただ一つできなければ、できなかったのと同じだと教えています。ですから、聖書は、神のことばはすべての人を罪の下に閉じ込めたと語っていま

す。それは、すべての人が神によって憐れみを受けるためです。

「もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。」(Iヨハネ 1:10)

神のことばは私たちの罪を指摘します。正しい心は、罪深い自分を認めることができます。私は罪を犯していないという者は、御言葉がない、つまり、御言葉がふさがれているのです。

2.自分の弱さを知っている

罪深いとは、自分の弱さを知っているということです。それは、自分の限界を知っているということです。誰もが制限を受けていますから、神の前ですべてが完璧な人などいません。パウロは、罪を弱さと呼び、次のように言いました。

「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」(IIコリント 12:9)

自分の限界を知れば知るほど、それを補う十字架の愛が見えてきて、神なしでは生きていけないことに気づき、実を結ぶようになっていくのです。しかし、自分の弱さを認められない人は、自分に都合のいいようにしか御言葉を聞きません。

3. 真理を求める心

真理を求めるとは、神の答えを求めることです。制約を受けるようになってから人類は、自分はどこから来てどこへ行くのか、何のために生きているのか、死んだらどうなるのかという疑問を抱くようになりました。その答えを神に求めることを正しい心ということです。神に真理を求めると、御言葉が本当に心の中に入ってきます。真理を求める心を持って御言葉を聞くと、自分の中にある疑問をしっかりと見つめ、死んだらどうなるのかを考えて、絶望して、神に答えを求めることです。本当に神に真理を求めるには、絶望する勇気が必要なのです。

■イエス・キリストを中心に置く

「あかりをつけてから、それを器で隠したり、寝台の下に置いたりする者はありません。燭台の上に置きます。入って来る人々に、その光が見えるためです。隠れているもので、あらわにならぬものはなく、秘密にされているもので、知られず、また現れないものはありません。」(ルカ 8:16-17)

イエス・キリストを信じたなら、心の中心にキリストを置きなさいということです。クリスチャンとしての生き方ができないのは、イエス様を中心にしていないからです。光はすべてを明らかにしてくれるものです。イエス・キリストを中心に置くなら、イエス様が全てのことを導く羅針盤になります。

私たちの人生は暗やみのようなものです。イエス・キリストは、暗闇を照らす光です。光をもらったのだから、あなたの人生の中心にキリストを置き、そうすれば、イエス様が進むべき道を教えてくれ、あなたは実を結ぶ者となるのです。

「だから、聞き方に注意しなさい。というのは、持っている人は、さらに与えられ、持たない人は、持っていると思っているものまでも取り上げられるからです。」(ルカ 8:18)

あなたは、その宝を持っているのですから、さらに平安を増し加える方向に進みましょう。永遠のいのちを持っていない人は、この体が朽ちてしまえば、すべてを失います。せっかくいつまでも残る宝を手にしたのですから、その宝を増やしていきましょう。つまり、イエス・キリストとの関係をますます豊かなものにしましょう。キリストが来たのはそのためだからです。

「盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。」
(ヨハネ 10:10)

■神のことばを聞いて行う者となる

「イエスのところに母と兄弟たちが来たが、群衆のためにそばへ近寄れなかった。それでイエスに、「あなたのお母さんと兄弟たちが、あなたに会おうとし

て、外に立っています」という知らせがあった。ところが、イエスは人々にこう答えられた。「わたしの母、わたしの兄弟たちとは、神のことばを聞いて行う人たちです。」(ルカ 8:19-21)

神にとっての家族は、神のことばを聞いて行う人たちです。信じるとはそういうことです。私たちにかけているのはここではないでしょうか。本当に正しい心で聞いているでしょうか。神のことばは私たちのためのことばです。素直に実行してみましよう。

聖書が教える行いとして大切なものを具体的に挙げるなら、1. 礼拝を守る、2. 献金、3. 証し・伝道です。

あなたにとって、礼拝の優先順位は何番でしょうか。イエス・キリストを選んだのであれば、まずは礼拝を守ることです。献金は、神への感謝を表すものです。恵みがわかるようになるためにも、感謝を表し続けることが大切です。そして、福音を伝えることによって、また自分自身にも福音の恵みが帰ってきます。この三つの行いを円滑にするために、祈ることが大切になります。

これらのことを行う人、それが神の家族なのです。耳障りのいい話だけを聞こうとするのではなく、神を第一に愛することを選びましょう。真の希望は、耳障りのいい言葉のなかにあるのではなく、苦しみの中にあるのです。病気を治すために、医者言うことを聞くように、自分の現実を認め、神のことばに聞き従いましょう。

「明かりを灯したら燭台の上に置く」それは、私たちの中心に光を置くことです。光を隠す者は実を結びません。あなたは、神なしでは生きられないように造られているのです。あなたを本気で愛し、あなたのためにいのちを捧げたのはイエス・キリストだけです。神を第一に愛し、神を中心に生きていきましょう。